

特集 7年目の東日本大震災

②「7年目の笑顔」

被災者に寄り添うことと見つめること「マゲナイゾ」

写真家 オヤマ カズヨシの挑戦

写真集「マゲナイゾ」より



家族



▶小山、最初の枚

2011年3月11日

未曾有の天災と言われる東日本大震災のその日、小山一芳は東京に居た。小山は数日前まで岩手県一関市に滞在していた。午後2時50分、東京でも震度5弱を記録した地震



童



は、東北地方に甚大な被害をもたらした。その情報を受け取った瞬間に、小山は車に飛び乗り、故郷東北を目指した。岩手県 関は彼の生まれ故郷なのだ。とにかく故郷に向かう。そこで写真を撮る。それは写真家としての彼が取るべき道であった。

車を走らせる。緯度が上がるにつれて、事の重大さが目に飛び込んでくる。…これはただ事ではない：偽らざる正直な感情だった。

小山は人が大好きだ。商業写真家として仕事でシャッターを押すときにも、被写体がプロのモデルであれ、普通の人であれ、人懐っこく語りかけ、被写体となる人の緊張を解きほぐす。

そんな人懐っこい写真家の目に、大地震と津波、そして原発事故に見舞われた人々の由々しき状況が飛び込んでくる。言葉を失いながらも、小山は自問自答した。俺は写真を撮るべきなのか、それとも被災者に手を差し伸べるべきなのか。

とにかく行けるところまで行ってみよう。小山は一閃を指して車を走らせた。途中何回も検問を受け、

男



迂回を繰り返し、通常の倍以上の時間を要したどり着いた一関の状況は小山の目を覆わせるものだった。崩れ落ちて屋根だけになった家、寸断された道路、夜になれば漆黒の闇が辺りを包む。

一関に着いて小山は逡巡した。カメラを手に取ることもできず、ただただ立ち尽くし、そして家族や友人の安否を気遣うことしかできなかった。「撮れない」あまりの悲惨な光景と被災者たちの状況に、小山の心は空虚になっていた。

何もできない自分自身の不甲斐なさに腹立たしきすら覚えていた。

そんな状況の中、小山は海を目指し、車を走らせた。次々に目に飛び込んでくる光景は、まさに地獄絵であった。一関には届かなかった津波の爪痕が海に近づくにつれて露骨に目に飛び込んでくる。そして生々しく小山の心に爪を立てた。

震災の日から数日を経たある日、空虚な心のまま文字通り荒涼とした海岸の風景を見る小山の目に飛び込んできたのは、ランドセルを背負った少女とその母親の姿だった。高台から降り、二人に歩み寄った小

女



山は母娘に話しかけた。

聞けば、4月から小学校に上がる予定の少女の元には入学の知らせが届かず、それでもランドセルを背負いたい少女は、何か思い出の品がないものかと、それまで通っていた津波にのまれた幼稚園に向かっているのだった。

ふと小山は二人に尋ねた。

「写真を撮ってもいいかな」。

母娘はにっこり笑った。

カメラを向けながら、小山は喋り続けた。人が大好きな小山の心に、炎が灯された。その日から、小山は被災者を撮り始めた。報道カメラマンが撮る悲惨な写真や悲しい写真は基本的に隠し撮りなのに対して、小山がひと声かけて撮る写真の中の被災者たちはいつも笑っていた。

今のカメラはデジタルであり、撮影できる枚数は無限大に近い。電源さえ確保できれば、いくらでも撮影できる。そうして小山は被災者たちを撮り続けた。

東北の人は「勝とう!」とは言わない。「マゲナイゾ(負けないぞ)」と言う。こうして、小山の写真集「マゲナイゾ」は生まれた。



絆





仲間